

京丹波町における須知高校のあり方懇話会（第4回）

次 第

日時 平成28年2月18日（木）
午後3時～
場所 京丹波町役場議場

1 開 会

2 あいさつ

3 懇話内容

(1) 京丹波町における須知高校のあり方に関する意見提言（案）について

(2) 意見交換

(3) その他

意見提言日程

日時：平成28年 月 日（ ） 午前・午後 時 分～

場所：

4 閉会

京丹波町における須知高校のあり方懇話会

～将来における存続可能な学校を目指して～

■設置目的

まち全体の人口減少が見込まれる中、まち・ひと・しごと創生を担う若者の健全な育成の観点から、京丹波町のまちづくりにおける京都府立須知高等学校の今後のあり方や活性化対策について、広く意見を求めるために設置する。

■委員（7名）

氏名	所属	役職
井戸 仁	京丹波町立蒲生野中学校教頭	
上田 秀男	須知高等学校同窓会代表	座長
江本 和生	京都府立須知高等学校 PTA 会長	
杉山 牧	杉山牧場勤務（須知高校卒業生）	
谷山 利彦	社会福祉法人山彦会勤務（須知高校卒業生）	
長谷川 清隆	京都府立須知高等学校校長	
平田 敬一	京丹波町立瑞穂中学校校長	座長職務代理

■開催日時

- | | | |
|-----|-----------|---------------------------|
| 第1回 | 10月29日（木） | 19時～22時：須知高校を取り巻く現状や課題 |
| 第2回 | 11月19日（木） | 15時～17時：魅力ある須知高校のあり方や活性化策 |
| 第3回 | 12月10日（木） | 15時～17時：魅力ある須知高校のあり方や活性化策 |
| 第4回 | 2月18日（木） | 15時～17時：意見提言とりまとめ |

■会議概要

京丹波町における須知高校の今後のあり方や活性化対策について、検討する観点や提言等について幅広く意見をいただき、次の3点で整理を行った。

- ① 京丹波町における須知高校の位置づけ
- ② 京丹波町として期待する存続可能な須知高校のあり方
- ③ 須知高校への支援のあり方と今後の展望について

■京丹波町における須知高校のあり方に関する基本的な考え方

京丹波町のまち・ひと・しごと創生に関する人口ビジョンでは、国立社会保障・人口問題研究所が示している、2040年推計人口「9,169人」を「10,000人程度」に維持することとして、京丹波町創生戦略の着実な実行が期待されている。

この懇話会においては、上記の取組みにおける京丹波町と町内唯一の高等教育機関である京都府立須知高等学校が有機的に連携を深め、将来にわたって相互に発展していくための検討を行い、次の基本的な考え方に基づいて意見提言を行うものである。

1 まちを支えるひとづくりの場

京丹波町の風土で育まれた教育の一体性や継続性を確保することは、町内の中学生に高等教育を受ける就学保障の視点や将来のまちを担う人材育成の視点からも重要であり、それを担っている須知高校に対する期待や支持は非常に大きなものがある。

京丹波町のまちづくりを担うひとづくりを一貫して行うことは、安心・安全につながる人材確保とともに、地域産業を活性化する上でも地域で活躍するひとづくりとなり、未来の京丹波町民をあらゆる面で支えることとなる。

【具体的方策例】

- ◆中学生と保護者のニーズに応え、卒業後の進路を開くために必要な学習支援として、学校外学習や資格取得などへの支援
- ◆地元中学校との間で学習や部活動などでの中高連携をさらに充実するための支援
- ◆須知高校への通学利便性の向上や町外からの入学生徒受入のための支援

2 食によるまちづくりの中心

京丹波町の最大の資源である豊かな森林や清流からの恵みを受けた農産物は、まちの宝であり「食のまち」として広く情報発信を行いながら、多くの来町者を呼び込む貴重な地域の財産である。この財産を活用しまちづくりを進める上では、須知高校の専門学科との連携は欠かさずこのできない要素であり、さらなる専門学科の充実と発展は、将来にわたってまちづくりの中心となるものである。

【具体的方策例】

- ◆地元企業などと連携したインターンシップにより、職業人としての意識醸成や専門的な知識技術習得への支援
- ◆地元企業などと共同した「地元産の食材を活かした加工食品」の開発と商品化への支援
- ◆安定的な存続のために、地元中学生を対象とした普通科を充実させるとともに京都府内を対象とした「農と食に関する専門学科」として調理師免許取得可能な特色ある学科・コース新設

- ◆専門学科と関連する学科を有する京都大学や京都府立大学などとの高大連携を拡充させるとともに、特別推薦指定校の制度化導入に向けた支援

3 伝統と歴史を引き継ぐ“まちの原点”

日本三大農牧学校の歴史を引き継ぐ須知高校は、まちの基幹産業を支え多くの地域人材を輩出するなど、京丹波町を創りあげてきた拠点であり、その伝統と歴史は、“まちの原点”というべき大きな柱のひとつである。

【具体的方策例】

- ◆京都府農牧学校をはじめとする地元のロケーションを活かした地域研究「須高学」「京丹波町学」創設への支援
- ◆ホッケーや野球などの特色ある部活動を充実させるための支援
- ◆高校または大学卒業後に地元で活躍することができるよう、町職員採用推薦制度や地元企業等への就職斡旋などの支援

●以下は、委員からの主な意見

<① 京丹波町における須知高校の位置付け>

- ・町内唯一の高等教育機関であり、町内で育まれた人材を大きな安心感を持ってつないでいける地域に根ざした身近な学校である。地域にあることで様々な接点をもつことができ、「将来にわたってつなぐ」という地域活性化の原動力である人材育成の場である。
- ・地域で育った若者にとってあこがれの存在となる部活動や、地域と連携した取組みを実践、継続していくことで自己肯定感を高めることにつながるなど、地域学を学ぶことにより郷土愛の醸成につながっている。
- ・きめ細やかな指導が出来るという特色は、町内中学校から積極的な選択によって進学される要因にもつながるものと考えられる。
- ・須知高校創立の歴史、京丹波町が「食のまち」であること、町内にある施設環境などを総体的に考える中で、京丹波町の特色を活かした教育や実践の場を広げることができる学校であり、地域産業を活性化する場である。

<② 京丹波町として期待する存続可能な須知高校のあり方>

- ・町内で育まれた地域人材を守り育てていく段階において、「京丹波町の福祉・教育のネットワークづくり」に須知高校も含めて一体的にサポートをする仕組みづくりが必要である。
- ・子どもの価値観も様々な広がりを見せている中で、自己を客観的に見直す場であってほしい。そのためには自己への評価を受け、存在感を経験することが重要で、勇気と自信をもって社会に出ることができる場であってほしい。
- ・地域の中で学ぶ、評価される機会をもつことにより、須知高校での学びの特色を出すことにつながり、中学生にとってもその魅力を発信することで、将来的にはキャリア教育の推進にもつながるものと考えられる。
- ・町内の小中学校や大学との連携を図る校種間連携事業は、お互いがそれぞれの立場、分野において有用であることが重要である。京丹波町では、企業も含めて須知高校とさらに連携、継続、充実を図っていくことが、食のまちというブランド化にもつながっていくと考えられる。
- ・須知高校で実践しているカリキュラムや部活動の状況など、広く OB 在籍の企業訪問や地域内へ情報発信することが、ひとのつながりや進学・就職といった機会に大きな影響をもつ。オープンキャンパスのような取組みを継続的に実施することも必要であると考えられる。

<③ 須知高校への支援のあり方と今後の展望について>

- ・専門学科と地域内産業がつながる環境が京丹波町にはあるのではないかと。専門学科を卒業し関連産業への就業や専門学部への進学など、町をあげてブランド化を進める取組みが必要である。

- ・専門学科として特色を出すために、食や農に関する6次産業化など食のまちとしてブランディングする方法として「調理師免許取得可能コースの設置」が必要ではないか。
- ・町内中学校との学力向上における相互連携や、京都大学大学院農学研究科附属牧場との連携など、町教育行政と一体となった教育価値の創出につなげていくことが重要である。
- ・地域内にある高校としての重要性や魅力を伝えつつ、「須高学（まちの中の位置づけや人材育成機能）」という特性を発信し、地域や企業が育てる参加型の取組みによって京丹波町ならではの「京丹波町学」という地域学の創出につなげていけないか。
- ・京都府及び京都府教育委員会と連携調整すべき事項については、京丹波町・須知高校のみならず、地元企業、各種団体、同窓会が一体となって「オール京丹波」で取組みを進めていくことが重要である。